

ザメンホフ祭

Zamenhofa Festo 2016

2016年12月17日（土）

PROGRAMO

- 1430 開会挨拶（猪飼）
 - 1440 参加者自己紹介
 - 1500 電子紙芝居：ごんぎつね Gon-Vulpo（山田）
 - 1530 本の紹介（鈴木、伊藤、前田）
 - 1555 休憩・記念写真
 - 1610 スピーチ（堀田、猪飼）
 - 1640 世界エスペラント大会の楽しみ（黒柳）
 - 1700 歌、アピール、お知らせ等
 - 1730 閉会挨拶（猪飼）
-

1800 第二部懇親会

主催 名古屋エスペラントセンター

Por Pli da Kantado

鈴木善彦

1. "Por Pli da Kantado"の概要

愛知県労働者研修センター（瀬戸市）で開催された第63回日本エスペラント大会（1976年8月21日22日468名参加者）の記念品として出版された楽譜付の歌集で、エスペラント訳された民謡・愛唱歌を世界各国の協力者を通じ集めたものである。

磯部晶策さんを編集責任者とし、集まった有志でグループ・オルキードイを結成し、名古屋エスペラントセンターの事務所（当時は名古屋市東区東桜にあった東新ビル24号）で編集出版作業をおこなった。

グループ・オルキードイは"Kien la Poezio?"をテキストに、エスペラントでの詩の作り方の勉強会を行い、日本の歌をエスペラントに訳すとともに、楽譜を手作業で書くなどの作業を実施した。表紙は竹崎睦子さん作成。

2. 磯部晶策さんについて

1926年満州（現在、中国東北部）に生まれる。2016年7月22日逝去。90歳。

亡くなるまで貿易・食品などに関するコンサルタントの仕事を続け、有限会社磯部晶策事務所（名古屋市東区徳川1の日本陶業新聞社方）の代表者として講演会や「磯部晶策レポート」（食品に関するミニコミ紙）の発行を続ける。

1951～1952年頃、結核サナトリウムで療養中にエスペラントの学習開始。

第2回東海大会（1953年5月10日 岐阜県養老町高田中学校100名参加）に参加。早稲田裕氏らと親しくなる。

名古屋大学医学部講師を一時務める。

著書として、

- ・『食品を見分ける』（岩波新書）1977年11月21日
- ・『世界の食べもの・時をこえる旅II』（風媒社）
1996年11月15日
- ・『詩歌集抄 郷愁』（北の街社）1996年2月26日
- ・『ごまかしのない食品』（晶文社出版）1997年12月10日
- ・『食品を複眼で見る』（シーズ・プランニング）
2006年9月1日
- ・『詩歌集抄胡笳』（シーズ・プランニング）2008年4月20日

他

- ・『あざみとつめ草の歌』
（スコットランド・アイルランド民謡解説）
- ・"Por Pli da Kantado"

など 多数。

3. "Kien la Poezio?" について

1957年、イギリスで出版。著者はBrendon Clark氏。

内容：エスペラント詩の原則・オリジナルや訳されたエスペラント詩・主なsinonimo（同義・類語）などが掲載。

詩の原則とは：ritmo（律・リズム）、rimo（韻・脚韻）、elizio（語末の母音の省略）、・・・。

4. "Por Pli da Kantado" の内容・特徴

様々な国・地域の民謡・愛唱歌など41曲を集めている。日本、アイルランド、アメリカ、ロシア、ドイツ、スコットランド、イングランド、ボスニア、スロバキア、マケドニア、オーストラリア、メキシコなど。

すべての曲に楽譜がついている。オルキードイのメンバーが作成。

殆どは原詩（歌詞）をエスペラント訳したものであるが、"Ho, Vivu Verda Stel"のようにエスペラントで書かれたものもある。

この地方の訳者を列記すると、磯部晶策、丹羽正久、山田義、森田明、加知輝彦、鈴木善彦。

それぞれの曲について、最終章にコメントがあり、磯部さんがその内容や成り立ちなどを説明している。

“Krimeo estas nia – Reveno de la Imperio”

伊藤俊彦

2014年3月16日、ウクライナの一部であったクリミア自治共和国とセヴァストポリ特別市で住民投票が行われ、圧倒的多数（公式発表では97%！）の賛成によりロシア編入が支持され、18日にはプーチンがロシアへの編入を発表した。編入はロシアでは熱狂的に支持され、プーチンの支持率は跳ね上がり、「クリミアはわれわれのもの」は流行語ナンバーワンになった。他方で、欧米諸国からは力による領土拡大だとして非難を浴び、ロシアへの経済制裁が行われ、G8からも事実上追放された。また、東ウクライナでは政府軍と親ロシア派との戦闘がなお続いている。この大事件を市民へのインタビューを中心に追求したのが本書である。

著者はフィンランド人のジャーナリスト。前著Homoj de Putin (2014)では、プーチンの高い支持率の原因をさぐるため、ロシア市民にインタビューを重ねた。同書刊行後、クリミア事件に絞ってさらに取材を重ねて、本書を刊行した。

著者は2014年9月に、クリミアの首都シンフェロポリ、軍都

セヴァストポリ、ウクライナの首都キエフ、さらにその後モスクワに滞在し、ロシア人、ウクライナ人、クリミア・タタール人に対し、この事件の意味をどう考えるかについて質問を重ねる。エスペランチストも何人か登場する。立場や世界観が違えば、事件の評価や歴史の解釈も違ってくる。編入を歓迎する人、あくまで反対してウクライナに亡命した人、なおクリミアに留まって生きる人もいる。こうして、大部分は無名の市民たちの証言から事件の意味が多角的に照射されることになる。

それまで平和に共存していた隣人がいきなり不倶戴天の敵となる。旧ユーゴスラヴィアの解体を思い出させる現象が繰り返される。あるクリミアのロシア人は、ウクライナ新政権はファシストだ、ロシアの特殊部隊（「緑の人」verdulojと呼ばれる）が来なければ、彼らはクリミアに侵入してロシア人を虐殺していたと主張する。クリミア・タタール人も同様にテロリストだと。他方で、そのクリミア・タタール人から見れば、事件は全く別の様相を帯びる。彼らは1944年にナチスに協力したとしてスターリンにより中央アジアに強制移住させられ、ソ連解体後、帰還を許されたが、その後も差別に苦しんできた。クリミアのロシアへの編入に伴い差別が再燃している。新たな支配者であるロシアは、ソ連による全体主義的支配体制や弾圧を連想させる。彼らにとっては民主主義的、ヨーロッパ的方向こそが目指すべき道である。

ことはそうした大状況だけにとどまらない。ある年金生活者は海岸に住むのが夢で、クリミアに別荘を建てたが、編入によってそこはロシア領になってしまった。住みなれた東ウクライナのドネツク州では戦闘が続き、戻るに戻れない。家族からも引き離されてしまった。これが人生か、どうすればいいのか、と彼は嘆く。クリミア問題という大事件の背後に、そうした無数の人々の生活がある。

最終章には、ロシアのリベラルな野党の市民プラットフォーム

の代表を務めたイリーナ・プロホロヴァへのインタビューが掲載されている。彼女によれば、ソ連の解体は、抑圧から解放され、より良い自由な国を作るチャンスだった。ところが、プーチンが権力を掌握して、この方向を変えてしまった。彼はソ連の解体を「20世紀における地政学上の大惨事」だと主張して国民のトラウマに訴えかけ、「帝国の復活」を目論んでいるという。クリミア併合から1年余が経過し、急速な軍事化の一方で、当時の熱狂は醒め、経済制裁、原油価格の低下、クリミア経営のための膨大な経費負担などで不況が進行し、著者は、「冷蔵庫とテレビの間の最終戦争」、すなわち市民生活と愛国的プロパガンダとの最終戦争が始まったというロシア人の皮肉な指摘で本書を終えている。

国民の大国意識に訴えかけ、同時に、自国は敵対的な国家に囲まれていると危機意識を煽り、近隣諸国との信頼関係を破壊し、異論の持ち主を「外国のエージェント」だとして排除する政治手法。クリミアやロシアだけではなく、まさに現在の日本の政治状況そのものではないか。

本書は、エスペラント版のほか、フィンランド、スウェーデン語版が同時に刊行された。現在進行中の事件をめぐる分析を、雑誌記事やネットではなく、まとまった書籍のかたちで、それも明晰なエスペラントで読めるのは喜ばしい。情報の洪水のなかで、エスペラントによる時事的な情報の発信の意味を改めて考えさせてくれる本である。

Kalle Kniivilä著, Mondial, 2015年刊, 152p

"La Movado" 775号 (2015.9) より転載

Konvinka kamuflaĵo

伊藤俊彦

Trevor STEELEはきわめて多作な作家である。私などには追いつけないようなスピードで次から次へと作品(それも大作)を発表する。しかも舞台はオーストラリアだけでなく、ヨーロッパ、ブラジル、インドなど世界各地に及ぶ。そうした彼の作品がどこまで自身の体験に根差したものなのか、よくわからなかったが、2014年にこの自伝が発表され、作品を構想するきっかけとなった体験が明らかにされた。例えば、彼は若いころ、あるドイツの施設の長を務める。そこは、強制収容所から辛くも生き延びたものの、罪を犯して服役していた者たちを収容し、更生させることを目的としていたが、彼はその入所者に危うく殺されそうになったり、散々な目に合う。Neniu ajn papilioの世界である。また離婚後の危機のさなかに、崩壊直前で混乱の極みにあったソ連や東欧、バルト諸国に滞在し、そこで図らずも歴史の大転換の現場に立ち会う。この体験は、のちにFalantaj Murojに結実する。その意味では本書はその作品理解に大いに有益である。しかし、本書は同時に、それ自体として波乱万丈の面白い読み物となっている。彼は友人から、お前はstrangulo(英語ではeccentric)だから好きだ、と言われたと書いているが、まさに、奇矯というか突飛なエピソードに満ち満ちている。

彼は60歳を過ぎるまで世界中を渡り歩き、英語、ドイツ語、エスペラントの教師、UEAの事務局長、マッサージ師など雑多な職業を経る。その後、オーストラリアに帰還し、また、やっとふさわしい伴侶に恵まれる。しかし、そうした長い放浪を経て、彼は自分が作家であったことを発見する。それまでの苦難や不幸がすべて作品に結実し、極めて多彩な文学世界が誕生することになる。その意味では本書は、現代のエスペラント界を代表する作家がその誕生を自ら語る記録となっている。

ところで、私には正直のところ、Konvinka kamuflaĵoというタイトルの意味がいまひとつ呑み込めなかった。本作品では、微に入り細をうがち、人生のディテールが語られている。例えば数多くの女性との不器用な関係、統合失調症を患う息子への悲痛な思いなどが極めて率直に説得的に語られている。その語り口は韜晦しているようには到底見えない。しかし、いくら言葉を尽くしてディテールを書き連ねたところで、それらは結局、仮象にすぎず、真の自己には到達できないという思いが、このタイトルには込められているのだろうか。

そのことと関係するかどうかはわからないが、彼は若いころ母親の影響でカトリシズムに沈潜し、神父を志した。しかし、やがてそれから離れ、一時は無神論者を自称する。ところが、ブラジルのBona Esperoでスピリティストたちに出会い、その治療を受け、それまでの信念体系が根底から覆される、「人生で最も決定的な瞬間」に遭遇する。また後にオーストラリアで民間治療を受けて自分の前世(11世紀の北フランスの死刑執行人!)を知る。

そうした体験の後、彼は輪廻転生を受け入れるが、このあたりの記述は率直なところ納得しがたい。ただ、彼にとっては、そこに圧倒的な体験のリアリティがあったのだろう、ということだけは少なくとも推測がつく。読むほどにいろいろなことを考えさせる本である。

Trevor Steele著, Flandra Esperanto-Ligo発行, 2014年, 270p

"La Revuo Orienta" 1135号 (2016.10) より転載

La Viro el la Pasinteco

前田可一

著者のJulian Modest (ユリアン・モデスト) は1952年ブルガリアのソフィア市に生まれ1977年にソフィア大学を卒業している。在学中の1973年にエスペラントの学習を開始し、Bulgara Esperantisto誌に記事や詩が掲載された。

1977年から1985年までハンガリーのブダペストに住み、ここで活発にエスペラントの小説、評論、記事を各種のエスペラント雑誌に発表している。1986年から1992年には彼の母校であるソフィア大学の講師として、エスペラント語、エスペラント文学、エスペラント運動の歴史を教えている。2000年からはBulgara Esperantisto誌の編集長となっている。

また、彼の小説のいくつかは英語、ロシア語等の数カ国の言語に翻訳されている。

La Viro el la Pasintecoは2012年から2013年に書かれた23編の小説が収められた107ページの書物である。いずれの小説も3ページから7ページの短編による構成で読みやすく、私にはKredu Min, Sinjorinoよりも楽に読め楽しめた。

この短編集のすべての物語の場所はブルガリアの各都市や村落という設定となっている。おそらく作者はブルガリア全土の今をこの短編集に集約しようとしたのだろう。

収録作品の多くは主人公の過去の出来事が現在の主人公の状況に及ぼしている影響の光と影を色濃く反映したものとなっている。それは過去における夢であったり、苦い体験であったり、甘美な思い出であったりするが、その多くの過去たちの現在の居場所は様々である。考えてみたら自分には過去がないと思いつく場合だってある。

時代的には東欧における共産主義体制の崩壊とその後の自由化の嵐の中で生きてきた人々が引きずっている一面が、主人公の老

人、子ども、若者、男女、狂人といった登場人物を介して物語られているといってもいいだろう。

物語の始まりは主人公の周辺の自然背景描写で開始されているもの、主人公の心理描写から始まるもの等、読者を物語へ導入するバリエーションや言い回しに工夫が感じられ、短編小説らしい風味となっている。

登場人物たちの描写についてはこの作者の好みなのか、目の色、髪の色といった人物を特徴づける形容表現が多様で面白い。

また、La Nova Vizaĝoという作品では、山中での事故により自分の顔と記憶を失い、手術により新しい顔と新しい名前を得る若い女性が描かれているが、謎が謎のままで仮面劇にも発展させないまま尻切れとんぼと感じさせるような構成のものもある。

表題作のLa Viro el la Pasintecoについてみると、主人公の小学生と思われる少年が、外交官である父親の失職に伴い、ノルウェイから家族四人でソフィアに帰国し、夏になったころ金の切れ目が縁の切れ目であるかのように母親が家を出て行く。その後冬の終りに突然戻ってきた母親に子供たちは喜んで飛びつき、父親にさよならともいわずに出て行き、母親とその新しい父親と大きな屋敷で暮らし始める。新しい父親は金持ちであるが子供たちと会うことも会話もほとんど無く無口なところは実の父に似ていた。実の父親とは月に一回会っていたが、父親が田舎に住むのに伴い会わなくなって所在不明となった。やがて大学生になった主人公は夏の初めに父親を探す決心をし、探し始める。祖父母の住んでいた町へ、父親の子供の頃からの友人のもとへ、と。そこで父親が辺境の村に住んでいることをつきとめる。とても小さな山奥の村であった。そこで出合った老人から聞いた父親の居場所を訪ねるとそこには父親がいた。主人公の知らなかった父親が。"Kaj Paĉjo kaj mi estis homoj el la pasinteco, sed mi ne certas, ĉu mi havis pasintecon."

少年の目から見た家族崩壊の物語でもあり、混乱の時代の空洞化した家族関係の透視図のようでもある。主人公の抱えている空洞、母親の抱える空洞、登場人物たちの空洞、さらには時代の空洞ともいえるかもしれない。

全編を通じて作者の、失われたものや敗者や狂人たちに向ける眼差しはやさしい。

すっきり、はっきり、くっきりポンの読後感はないが毎月一回継続している読書会で読めたことを喜びたい。

Julian Modest著, Dokumenta E-Centro発行, 2015年, 107p